【別冊１－３】

県立大学の設置検討に関する先進事例調査報告

長野県立大学【県立】

1　概要

名称	公立大学法人長野県立大学（英語名：The University of NAGANO）
住所	○三輪キャンパス 〒380-8525 長野県長野市三輪 8-49-7 （ＪＲ長野駅乗り換え長野電鉄（乗車６分）「本郷」駅下車（徒歩 10 分）） ○後町キャンパス　象山寮 〒380-0845 長野県長野市南長野西後町 614-1（旧後町小学校跡地） （ＪＲ長野駅乗り換え長野電鉄（乗車３分）「権堂」駅下車（徒歩８分））
開学	平成 30 年 4 月
学部・定員	○グローバルマネジメント学部グローバルマネジメント学科（170 名） ○健康発達学部食健康学科（30 名） ○健康発達学部こども学科（40 名）
理事長・学長	○初代理事長　安藤国威氏。元ソニー生命保険株式会社参与。 ○初代学長　金田一真澄氏。慶應義塾大学名誉教授。
特徴	○前身である長野県短期大学の同窓会組織が 12 万人の署名を添えて県議会に４年制化を請願し、採択されたことがきっかけ（平成４年３月） ○カリキュラムの特徴 ・一年次全寮制 ・二年次全員参加の海外プログラム（３～４週間） ・少人数教育 ・英語集中プログラム ・管理栄養士養成課程の臨地実習 500 時間　　など ○敷地 ・三輪キャンパス　短期大学の跡地を活用 ・後町キャンパス　学生寮建設にあたり、長野市の旧小学校跡地（土地）を借用し、建設した。

2　ヒアリング結果概要

（1）大学像

①経緯

・県内高校卒業者の８割以上が県外進学し、若者の県内定着が課題であったこと等から、平成 22 年に副知事を座長として、検討委員会が設置され、「長野県短期大学の将来構想に関する報告書」がまとめられ、これを受けて検討を進めた結果、平成 24 年２月に新たな県立４年制大学の開設が決定され、知事が県議会でその旨表明した。

・知事のトップダウンによる決定が大きい。長野県はこれまで教育県と言われてきたが、改めて教育に力を入れていこうと考え、県立大学の設置を決定した。

②県立大学の目的

・県立大学の３つの使命である「リーダー輩出」、「地域イノベーション」、「グローバル発信」が果たすべき役割と認識。

・長野県立大学においては、「グローバルな視野を持って、地域にイノベーションを起こすことができる人材の育成」をめざしており、先進的な教育プログラムや、学生参加による積極的な地域貢献活動などの取組が着実に進められていると考えている。

③学部・入学定員

・学部・学科の検討にあたっては、平成22年に行った県民･県内高校生･県内企業へのアンケート調査結果を参考にした。

・グローバルマネジメント学部は、県内高校生･企業の設置希望として「経済･経営･商学系」が多かったこと、少子高齢化や人口減少の影響を受けて国内市場が縮小する中で、県内企業の海外市場への展開や国外からの誘客を促進するためには、経営等の専門知識、グローバルな視点や新規事業の創造意欲が身に付いている人材の育成が必要であることから設置が決定された。

・グローバルな視野をもち、自律的な人材の育成のため、本学の特長である、「英語集中プログラム（週４回×100分授業で英語４技能を鍛錬）、２年次の海外短期プログラム、１年次全寮制、１年次からの基礎ゼミナール」を実施している。

・健康発達学部は、県短期大学に設置されていた幼児教育学科、健康栄養学科を発展的に４年制化したもの。

・各学部の合計の入学定員については、前身の県短期大学における入学定員（240名）がベースとなっており、県内の私立大学･短期大学への影響も考慮し240名のまま変えていない。

・寮生活を通じて、学生同士が学び合い、助け合いながら研鑽し、主体性や社会性、コミュニケーション力が自然と養われ、人間的にも成長していると感じている。

（２）入学・就職等

①入学状況

・【県内入学率】H30：57.9%、R1：40.2%、R2：49.0%、R3：45.3%
全国の県立大学の県内入学率（平均）は約50%のため、概ね想定どおり。

・県立大学であれば、全国区になり、全国から学生が集まるため、経営的には心配いらないと思われる。

・高校生だけでなく、高校の校長や進路指導の先生方、高校生の保護者にも県立大学の魅力を伝え、高校生が受験しやすい環境を整えることが必要。

②就職状況

・最初の卒業生となる現４年生の就職内定先（７月末現在）は、概ね当初の想定に近いかたちである。

・就職内定数（同一学生の重複を含む）は、県内：県外＝およそ６：４（７月末現在）

③大学の多様な役割

・地域の活性化や県内産業の振興のため、地域のニーズに応じた教育・共同研究や長野県における「知の拠点」としてのシンクタンク機能を充実させるため、令和４年４月に大学院を設置する予定。

（3）財務

①建設費

・建設費　109.3億円（寮建設費23億円を含む。土地は、前身の県短期大学敷地に建設したため、追加購入分のみ）

・財　源　地方債71億円　一般財源36億円　その他2億円

②運営費（平成2年度決算）

・経費　　15.5億円

・主な収入 運営費交付金：10.6億円　授業料等収入：4.8億円

4　その他

・県内大学の特色ある教育プログラムの立上げ支援（当初3年間）、新学部学科設置等による入学定員増を伴う施設設備整備費用（イニシャルコスト）への支援を行う県単独補助金を新設して、新県立大学の設立のみでなく、県内高等教育全体の振興をめざす姿を示して、理解を求めた。

・県立大学の役割については、検討段階から、県立短期大学があるからということではなく、ゼロベースで検討していた。地域活性化、産業振興に対する人材育成で、それにどういう素養が必要なのかという議論があり、常に、地域定着をめざしていた。

キャンパス・建物

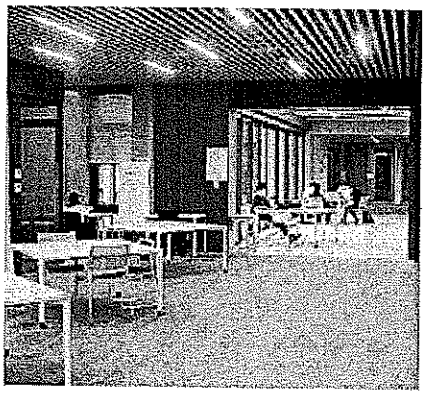
○前身の県短期大学の敷地を活用した。旧短期大学のグランドに新校舎を建築し、旧短期大学校舎を除去して前庭・駐車場等とした。

○県短期大学の図書館など、一部の建物は既存建物として活用している。

○校舎は、教室・研究室等からなる専有部の「イエ」と呼ばれるユニットに分散配置され、それらの間を共有部のキャンパスコモン（ミチ）でつなぐ形としている。

○長野県立大学の外観

○机、椅子等が配置された「ミチ」



三条市立大学【市立】

1　概要

名称	三条市立大学（英語名：Sanjo City University）
住所	〒955-0091 新潟県三条市上須頃1341番地（３街区） （燕三条駅より徒歩約10分）
開学	令和３年４月
学部・定員	工学部　技術・経営工学科（80名）
学長	○学長　アハメド　シャハリアル氏。 平成12年12月博士号取得。平成15年４月 新潟産業大学経済学部助教授、平成27年２月 沖縄科学技術大学院大学 技術移転セクション、令和元年８月三条市高等教育機関設置専門員、令和２年２月 三条市 総務部部主幹。 三条市立大学開設検討委員会 委員。
特徴	○「創造性豊かなテクノロジスト」（多様な工学技術について深い知識に加えて、経験を基にした創造性や実践力があり、技術と経営を効率的に組み合わせる技術マネジメント能力を有する人）の育成をめざします。 ○①機械工学を軸に実践的な理論を学ぶ、②アイデアを具現化するプロセスを実践的に学ぶ、③企業の現場で自分を試し、視野を広げる、④充実の実習環境と異分野の交流を育む環境。

2　ヒアリング結果概要

（１）大学像

①経緯

・総合計画策定作業において、少子高齢化の要因は、高校卒業に伴う市外・県外への進学等による人口流出等と分析し、その対応策として、高等教育環境の充実を図ることとした。

・平成26年10月の任期満了に伴う三条市長選挙において、当時現職の国定市長がマニフェストで「実学を学べるものづくり大学の誘致（又は設置）」を掲げて当選（３期目）。

・これらの流れで策定した三条市総合計画に基づき、大学の誘致・設置を検討することとなった。

②目的

・設置の主な目的は、地元企業が求める人材を育成することで、若年層の転出抑制を図ることとした。

③学部・入学定員

・三条市は、金属加工を中心としたものづくり産業が基幹産業の一つ。当時の市長が企業と懇談する中で、企業側から雇用のミスマッチを解消できる大学を期待する声もあり、趣旨に沿った学部・学科について、内部で検討し、検討委員会において意見を聴取したうえで工学部に決定。

・きめ細かな教育を行うために、少人数の定員で検討開始し、大学の運営における収支や地元企業における実習の実現可能性などを総合的に検討した結果、１学年 80 名が適切との判断に至った。

・学部の特徴は、１）機械工学を軸とした学際的な教育課程、２）工学部でありながら、経営系科目を設置、３）理論を学び、経験を経て創造力を育むカリキュラム、４）俯瞰力の養成、５）企業現場での実習。

・大学へのニーズを把握するため、高校生や企業等を対象としたアンケート調査は、開学までに３回行い、高校生については本学への進学希望者数を把握することを主眼に実施。

（２）入学・就職等

①入学状況

・令和３年４月の最初の入学者 82 名のうち、県内出身者は 35 名、市内出身者は４名。

②就職状況

・市内・県内入学率を高めるより、卒業後の就職先として、市内・県内に目を向けてもらうことを考える方が重要。

・１年次には必修科目「燕三条リテラシ」において、地元企業の視察、あるいは経営者の講演を聴く機会を設け、燕三条地域の産業構造、企業について理解を深めている。

・２年次、３年次には地元企業と連携した中長期間の産学連携実習を実施することとしており、その実習は、学生が技術力の高さや企業風土等を感じる機会となり得る。

・その実習を学生が地元企業に目を向けるきっかけにしたいと考えている。

・他方、将来的な学生確保の点から考えると、地元の中小企業だけでなく、都市部等の名の知れた企業に就職する学生も輩出したい。

③大学の役割・リカレント教育等

・地域に広く学習の機会を提供するため、特定の授業科目について、選考の上、聴講生、科目等履修生として受講を許可することとしている。

・三条市立大学教員の専門分野を紹介する連続セミナーを、地元企業に向け開催する予定。

（３）財務

①建設費

・建設費 81.3 億円

・財　源 地方債 42.4 億円　交付金 14.6 億円　一般財源 16.4 億　その他 7.9 億円

②運営費（令和３年度予算）

・経費　　7.0 億円

・主な収入 運営費交付金：5.4 億円　授業料収入：0.7 億円

※学生が４学年揃う時点で、経費は 6.3 億円、運営費交付金 4.7 億円、授業料収入 2.1 億円を見込む。

キャンパス・建物

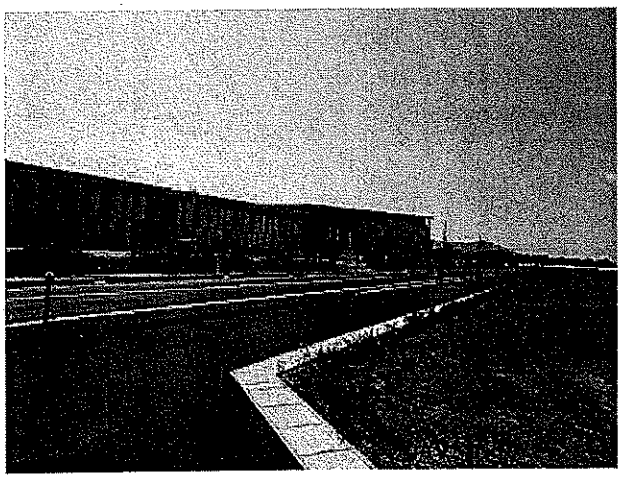
○大学の設置場所は、土地区画整理事業で、建設中の県立病院の近接地。

○用地（整備場所）の選定は、誘致をした三条看護・医療・歯科衛生専門学校の開設検討と並行して進め、大学と看護系専門学校の２施設を同一敷地内とすることで、食堂や駐車場等の整備費用の抑制が図られると考え、建設地を決定。専門学校との一体的な整備で、食堂は１か所のみ設置し、交流の場となることを期待している。

○４階建ての建物であり、１階の玄関から４階まで一直線となる階段が設けられている。

○廊下の空きスペースに、様々な椅子、ソファ、テーブルがあり、学生が自由に使える環境を整えている。

○三条市立大学の外観



○建物内を貫く広い階段

○廊下の空きスペースに、様々な椅子、ソファ、テーブル

○実験や実習のための様々な備品

共愛学園前橋国際大学【私立】

1　概要

名称	共愛学園前橋国際大学（英語名：KYOAI GAKUEN UNIVERSITY）
住所	〒379-2192 群馬県前橋市小屋原町 1154-4
アクセス	上越新幹線・高崎線　高崎駅乗り換え両毛線　駒形駅より徒歩 10 分
開学	平成 11 年 4 月（女子短期大学を 4 年制に）
学部学科	国際社会学部　国際社会学科
専攻 （コース）	国際社会専攻　英語コース　国際コース 情報・経営コース　心理・人間文化コース 地域児童教育専攻　児童教育コース（※学部名を変えずにコース制で対応）
定員	299 名/1 学年（開学当初は 250 名、その後 200 名→225 名→255 名と変遷） 国際社会専攻　249 名　地域児童教育専攻　50 名
学長	学長　大森　昭生氏 平成 15 年に国際社会学部長、副学長等を経て、平成 28 年より現職。（学部長の候補となった時点では 34 歳、ポストは教授ではなく、専任講師。学部長就任と同時に助教授（現：准教授）に昇格） 中央教育審議会大学分科会委員、内閣官房の地方創生に資する魅力ある地方大学の実現に向けた検討会議委員等
特徴	・定員 299 名の国際社会学部のみであるが、群馬県内からの進学率８～９割、群馬県への就職率が７～８割という地域と連携した取組を行う大学として顕著な実績を上げている。 ・地方に所在する小規模な私立大学でありながら、地域密着の教育力が高い評価を受け、国の様々な事業にも採択されている。かつては学生数が減少する事態に追い込まれながら、そこから地元のニーズを受け止める改革で、Ｖ字回復を果たした。
歴史	・設置者の学校法人共愛学園は、明治 21 年に群馬県のクリスチャン有志によって設立された前橋英和女学校を源流とし、翌年には経営母体として共愛社が創設された。現在、子ども園、学童クラブ、小学校、中学校、高等学校、短期大学、大学を有する。 ・昭和 63 年には、前身である共愛学園女子短期大学が開設され、平成 11 年にこれを共学の４年制大学に改組した。 ・２年目に定員割れとなり、様々な改革により、受験生が増加した。 ・令和３年には、他の学校法人から短期大学の移管（設置者変更）を受け、共愛学園前橋国際大学短期大学部を開学。
県内 入学	令和３年度の出身高校の所在地県別入学者数は、群馬県が 300 名と全体の 333 名の 90.0%を占めている。（令和元年度 87.7%、令和２年度 92.2%）
県内 就職	卒業生の 70%～80%が県内に就職。 （県内就職割合は、令和元年度 73.1%、令和２年度 72.1%）

2　ヒアリング結果概要

（1）全般

○群馬県の私立大学の学長という立場からいえば、県立大学をつくることだけで地方創生が実現できるのか若干疑問に思う。全国の公立大学で、地元の学生を育て、地元に就職している例をあまり知らない。看護など特定の学部でない限り、例えば、私立大学が県立大学などに公立化されると全国区になり難易度があがることにより、地元の学生が入れなくなる。

○県立大学を設置しても、入学者の確保など経営的には心配はないが、県内の私立大学のことをしっかりと考えないといけなく、共存共栄になるのであれば、つくる意味がある。三重県内の私立大学に1億円ずつ10年間補助金をだし、それにより定員を100名増やすという考え方もある。その方法が実現しないのであれば、県立大学をつくるということもある。

○学びの選択肢の拡大というより、地域で活躍する学生を育てるための地方創生という考え方で間違っていない。学生の希望を叶えるために県立大学はあるべきである。県立大学をつくることで、他の私立大学がなくなった場合には、学びの選択肢が拡大しないことになる。

○18歳人口が今後減っていくことが一番の課題。

○今の大学生はしっかり勉強しており、協働する力や課題解決能力のあるコンピテンシーを備えている。三重県の大学進学率が全国より低いのであれば、それをあげていくことにより、大学進学者を増やすことができる。地元の産業界の発展のためには、地域全体として大卒人材を供給していくことは重要である。

（2）県内入学及び県内就職を高める取組

○開学２年目に定員割れをした際、教職員とのディスカッションで、地元の学生が来てくれないのに、全国から学生がくるわけがないとの意見が出た。

○大学が学生・地域のために存在することを認識し教職員が共通理念のもと一体となって参画する地域重視・学生中心の学校運営を行っている。また、「大学」という「コミュニティ」で様々な主体が学生や大学を支えるパートナーになっていただいている。

○「地方」「小規模」大学である本学は、一般的にデメリットと考えられる「地方」や「小規模」という条件をメリットに転換し、学びのフィールドをキャンパスだけでなく、 地域全体に広げて地方だからこそできる「地学一体の学び」に取り組むと同時に、少人数 によるアクティブラーニングの実践等に取り組み、小規模だからこそできる教育の質転換を図っている。

○県庁や市役所、経済団体が、寄付講座を設けたり、「群馬」と名前がつく科目を複数開設するなど、地域をテーマとし、地元を知ることを重視することで、群馬に残ることを前向きに感じる雰囲気ができている。

○学生研修のなかには、地元企業の海外の進出先に研修にいき、群馬の中小企業が現地で雇用を生み、尊敬されている姿をみることで、地元企業に愛着をもつ学生もいて、就職につながっている。

○共愛学園前橋国際大学に入学して力がついた学生の割合が３割から９割に上がっている。定員割れしていた開学当時には、力がついたとアンケートに回答する学生は３割しかいなかった。（その数値が上昇することと比例して受験生が増えた。）

○就職のために、合同企業説明会を開き、200～300社が参加している。参加企業の９割が県内企業である。また、連携協定を結んでいる地元の経済同友会に協力してもらって、保護者向けの就職説明会を開催し、県内企業の良さ、そこに就職している卒業生を知ってもらっている。

（３）地域で果たしている大学の役割

○高校では、指導要領がかわり探究学習が始まっている。県立前橋高校で「前橋研究」をしているなど、地元の高校生が地元に目を向けることで、地元の大学に進学するきっかけとなる。

○大学は探究学習のプロであるので、高校との連携による教育を行うことができる。高校と深く連携することで、高校の生徒や先生が大学に親近感がわき、将来の進学につながる。

（４）その他

○群馬県にあるのに、有名私立大学と同じことをしようとすることはいけないし、できない。一方で、他大学では本学行っている教育はできない。そこにあるのは優劣ではなく、役割の違いだ。小さな東大・早稲田大学をめざすのではなく、ココでしかできない学び、本学でしかできない学びを提供していくことが肝要。

○偏差値教育が抜け切れていないのは事実。「負け組が地元に残る」という感覚があり、優秀な学生ほど首都圏に行っていたが、東日本大震災の影響などで、そういった感覚に変化が起こっている。

キャンパス・建物

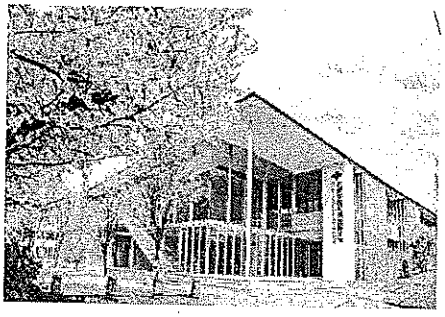
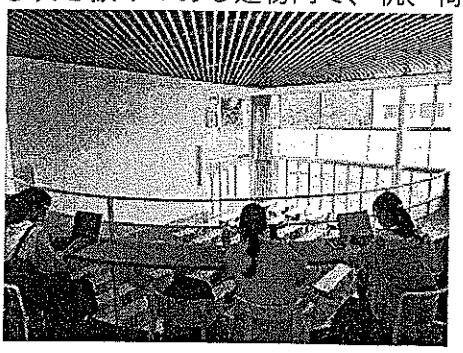
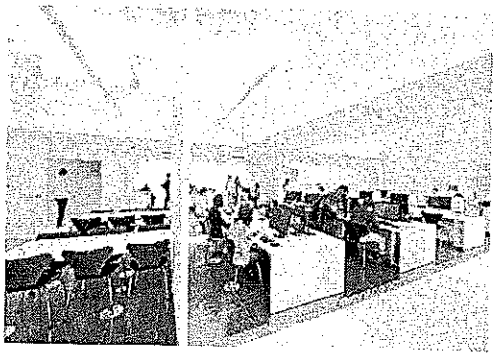
○１号館から５号館のうち、平成23年に新築されたラーニングコモンズを中心に据えた４号館、令和３年に新築した学生支援と地域との結節点である５号館はともに、ガラス張り、吹き抜けを多く設けている。グッドデザインや建築学会賞を受賞したり、有名建築雑誌に特集されたりしている。しかし、建築費はさほど高いわけではない。

○構内の木などの緑は、学生が学ぶために必要と考え配置している。

○教室以外にも、廊下などに机、椅子、コンセントを配置し、学生が勉強できる環境を整えている。教室のほとんどが、アクティブラーニング仕様であり、全館WI-FIのユビキタスキャンパスでBYOD（私的デバイスの活用）を実施。教授会等もペーパレスとなっている。

○４号館　KYOAI COMMONS

○５号館 KYOAI GLOCAL GATEWAY



○吹き抜けのある建物内で、机、椅子を設置